

先輩、これから絶対、誰にも負けないでくださいね（体験版）

にりゆー

炎天下の校庭をつきつて、僕はようやくプレハブ小屋の前に着いた。

汗を拭き、呼吸を整えて、そっと部室のドアを開ける。

「お願いしまーす……」

小声で礼をして、クーラーの効いた空気にホッと一息。それから、部室を見回す。

まさに四角を置いただけみたいなプレハブ小屋は照明が点いていなくて、小さな窓から入ってくる明かりだけでは真夏でも薄暗い。

広い空間のほとんどをリングが占め、その周辺にサンドバッグや姿見、パンチングボールや用具入れが窮屈に置かれている。自分で設置して一年間使ったのだから、目をつむっていてもどこに何があるか分かる。

その隅っこに、教室の机が二つ並んでいて、女の子が突っ伏して寝ていた。

「やっぱり、寝ちゃってたか……」

僕は部室の照明を点けて、そっと彼女に近づく。

すうすうと安らかな寝息に合わせて、シユシユで右に寄せた短いポニーテールがびよこびよこ揺れる。真ん中を分けた前髪は左側がバツテンのヘアピン二つで留められていて、かわいらしいおでこと太めの眉が見え隠れする。

半袖シャツの上からサマーニットを着込んだ制服はきっちりしているながらも堅苦しい印象がなくて、なんだか見ているだけで落ち着く着こなした。

机の上で組まれた腕は丸っこく、その上にもっちりしたほっぺが載つけられている。

そして、見ないようには思いついながらもつい視線が向いてしまうのが、腕でできた半円の奥。暖色のサマーニットを押し上げてカーブを描く、丸いもの。机の上に載っている、胸。おっぱい。バスト。

おっぱいって机の上に載せられるものだってことも、そうしたくなるくらい重たいんだってことも、僕は彼女と部活をして初めて知った。

……胸のことは、さておき。

柔らかなような四肢やほった、幸せそうな寝顔は、見ているだけで外の暑さも忘れてほっこりしてしまう、そんな女の子。

部長の僕を除いて唯一のボクシング部部員、風呂吹雪菜だ。

「雪菜ちゃん、起きて」

声をかけ、机を揺らすと。

「うみゅ……ん……ひゃっ!? せ、先輩!? す、すみませ

ん! お見苦しいところをお見せしました!」

「ううん、待たせてごめんね。クーラー点けておいてくれてありがと」

少しまどろんだ雪菜ちゃんは、僕に気付くと飛び起きた。

突っ伏していた上半身を起こし、僕を見て、入口のドアを見て時計を見て、立ち上がり、自分の髪を触って整え、別に立つ必要はなかったと気付いて着席する。

穏やかな寝顔からうってかわって、視線も手足も走り回る子犬みたいに動き回る。

ちなみに、入室のときにわざと音を立てて雪菜ちゃんを起こし、僕に会う前に時間を与えることもできる。ただ以

前それをやったら余計に慌てた雪菜ちゃんが椅子から転げ落ちたので、静かに起こすようにしている。

僕も向かいに座ると、雪菜ちゃんもようやく落ち着いて話し始めることができた。

「私の方こそ、すみません。一学期最後の日ですので、先輩にワガママ言って付き合ってもらっちゃって……クラスのお友達とお話したかったですよね」

「いやいや、アイツらは大丈夫だから。快く送り出してくれたよ」

「わあ、しばらく会えなくても友情は変わらないんですね！素敵です！」

雪菜ちゃんが手を叩いて感激する。ごめん、雪菜ちゃんにウソついた。

同じ終業式に出て同じ時間割でホームルームが終わったのに、雪菜ちゃんが寝ちゃうほど僕が遅れたのは、クラスの男子どもを振り切るのに時間をくったからだ。

確かに普段はいいやつらで、しばらく会えないのは寂しい。だけど、今日ばかりは知ったことか。

女子と密室で二人っきり、という字面だけに反応したアホどもがどれほど見苦しいか、雪菜ちゃんに聞かせることなんてできない。

あいつら、ただボクシングの練習がしたいだけの雪菜ちゃんをそういう目で見ないように、僕がどれほど苦労してるか知らないで。

「えっと……それで、お約束したとおり、お弁当を作ってきました。食べて、いただけますか？」

「もちろん、ありがたくいただきます」

真剣な顔の雪菜ちゃんに答えると、彼女は足元の鞆を膝に持ち上げて2つの大きな弁当箱を取り出す。

終業式の日には午前中まで。放課後に部室に集まって、こうしてお昼を食べる約束をしていた。いつも練習を見てくれるお礼だと言って、お弁当まで作ってきてくれた。唯一の部員に感謝するのは僕の方だって言っても、こういうときの雪菜ちゃんはけっこう頑固で、僕の方が根負けした。

「お母さんとか、クラスの友達にも相談して……悪くない出来だとは、思うんですが」

「いやこれは……すごいね」

かわいい雪菜ちゃんには似つかわしくない無骨な弁当箱の蓋を開けると、おにぎりと色とりどりのおかずが目飛び込んでくる。

まず目を引くのは、鮮やかな黄色の卵焼き。底の深い弁当箱にきっちり収まる綺麗な形で、それでいて焦げ目ひとつない。頑張り屋の雪菜ちゃんが何度も何度も練習する姿が目には浮かぶよう。

それから、一口というには一回り大きなサイズが嬉しい唐揚げ。これも綺麗に揚がっていて、手際の良さが窺い知れる。

彩り要員のミニトマトやレタスも新鮮で、このお弁当を材料選びから入念に作ってくれたことが見てとれる。

「麦茶も作ってきました。ぬるいのと冷たいのありますから、どんどん飲んでくださいね。今日も暑いですし」

僕がお弁当に見とれているうちに、雪菜ちゃんはさらに

2リットルの水筒を二つ、机に並べる。

「こんなに……嬉しいけど、重かったんじゃない？」

「今日は他に持ち物ありませんし、それに、私もけっこう筋肉ついたんですよ？」

そう言つて雪菜ちゃんは腕を持ち上げ、力こぶを作つてみせる。とはいっても、ふっくらした雪菜ちゃんの二の腕は、力を籠めてもあまり変わったようには見えない。

普段サンドバッグ打ちを押さえている僕からしてもパワーがついたのは本当だと思うけど、その筋肉はまだまだ女の子らしい脂肪しぼうに埋もれてしまっているようだった。

「……ええっと、その……食べましょう！」

「いただきます」

雪菜ちゃんが先陣を切つて、自分の卵焼きを口に運ぶ。僕も釣られて同じく卵焼きを選ぶ。

「んっ……美味しいです！ 我ながら、うまく焼けました！」

「うん、薄く巻けてて、ふわふわした食感だね」

二人してほぼ同時にぺろりと一個たいらげると、次は唐揚げへ。

「んっっ！ ジューシーでたまりません！ 冷めても美味しい揚げ方っていうのを調べてみたんですが、本当でした！」

「本当に美味しいね。これはご飯が欲しくなるな」

雪菜ちゃんがお茶を飲む間に、僕はおにぎりへ手を伸ばす。

海苔が巻かれた大きめのおにぎりは、見た目よりさらに重かった。しっかりと握られていて、食べごたえ抜群。

遅れておにぎりを持った雪菜ちゃんが、恥ずかしそうに言う。

「えっと、先輩にいっぱい食べてほしくて、お弁当箱になるべく入るようになって……それとその、私も、食べたくて……」

「そうだね、ボクシング部だもの。夏休みに備えていっぱい食べないとね」

「は、はい！ いっぱい食べます！」

それから僕達は美味しいお弁当を夢中で食べた。

ほぼ同時に食べ終わって、冷たいお茶をデザート代わりにほっと一息。

「ふう……ごちそうさまでした」

「お粗末さまでした。先輩に食べてもらおうお弁当が美味しくてきて、良かったです」

「とくにおにぎりが嬉しかったな。しばらく食べられないだろうし……」

「あ……」

「あ……」

なんとなく気まずい空気になってしまった。

僕はこの学校では雪菜ちゃんと二人きりのボクシング部で部長をやっているけれど、校外でボクシングジムにも所属している。

小学生のときに入門したジムで、ジュニア大会でも目立つ成績を収めることができた。今はプロを目指して、ジムで大人に混じって練習を続けている。

そんな僕に、破格のオフアアがあった。世界中から将来有望なユース選手を集めての交流を兼ねた強化合宿、その

日本代表の一人に選ばれたのだ。

将来のライバル達と切磋琢磨せつさくたくましながら、一流の指導を受けられる。僕は一も二もなく承諾した。

というわけで、僕の夏休みはほとんど海外だ。今日のお弁当はその壮行会みたいなものも兼ねている。その間、ボクシング部は雪菜ちゃん一人になる。

「先輩！ 頑張ってくださいね！ 私もいわば副部长、先輩がいない間のボクシング部を守ってみせます！」

「いや、そんなに気合いいれなくても……気が向いたときに練習してくれば大丈夫だよ……？」

このボクシング部は、もともとは僕の練習のためだけに作ったもの。進学した高校がジムから遠く放課後に通えなくなつて、平日に自主練だけでもできるようにと学校に相談した結果だ。ジムのトレーナーも賛成してくれたし、クラスの友人たちは埃だらけだった空きプレハブの掃除を手伝ってくれた。

最初の一年間は僕だけで練習していたこの部室に、雪菜ちゃんがやってきた。

ダイエツトを兼ねてマイペースに運動できる部活を探しているという雪菜ちゃんを説得したのは僕だ。一人でも多くの人にボクシングに触れてもらいたかつたし、広い部室を僕だけで使うのは後ろめたい気持ちもあつた。

マイペースということなら何せ部員は雪菜ちゃんを入れても二人きり、誰に合わせる必要もない。サンドバッグを叩けることも魅力だつたみたいだ。

雪菜ちゃんは試合に出ることは目標にせず、基礎の体力作りやパンチの練習だけを黙々とこなしてきた。3ヶ月が過ぎた今、僕から見ても見違えるほどにボクサーらしくなつてきていた。

「はい、たくさん来ちゃいますよ！ もっと上手くなりたいです！」

マイペースな運動という当初の目標はどこへやら、雪菜ちゃんは熱心に練習を続けていた。最初にオーバーワークの危険性を教えておいて、本当に良かった。

もともと真面目で素直な雪菜ちゃんは、苦しい筋トレやフォームを崩しちゃいけないパンチ練習にも手を抜かず取り組む。それで上達する手応えがあるのが嬉しいらしく、ますます集中して練習していた。

一方で、試合に出ることはまったく興味がないらしい。一度聞いてみたら、すごく困つた顔をされたのもう言わない。他人と競うのが苦手みたいで、そういう意味では黙々と練習しているのは確かにマイペースな運動なのだろう。

「いや、夏休みなんだし……友達と遊んだりとか……」

「それもやりますが、空いた時間は部室にいますよ」
オーバーワークがちよつと心配だつたけど、明日から日本にいない僕がこれ以上心配しても仕方ない。

しばらく夏休みの予定なんかの雑談をして、その日は解散した。

それから一ヶ月。夏休みが終わるまであと数日という暑い日。

僕はまた蒸し暑い校庭を突っ切つて、部室の前に立っていた。

「お願いします」

「あつ先輩！ お帰りなさい！」

中に入ると、雪菜ちゃんが隣の教室机に座って待っていてくれた。飛び出すように立ち上がり、駆け足で入口まで出迎えてくれる。

合宿を終えて昨日帰国した僕は、今日さっそく雪菜ちゃんに報告に来ていた。

「はいこれ、お土産。……雪菜ちゃん、ちょっと日焼けした？」

「あっ、はい……外を走るのは早朝だけにした日焼け止めを塗ったり気をつけたんですが、なかなか……」

「すごいね、いっぱい練習したんだ」

「はい、それはもう！」

連れだって机まで歩き、そこに着席して向かい合った。

「それで、先輩の方はどうでした？」

「うん、とってもタメになったと思う。部活とジムだけだと同世代のライバルっていないから、闘争心みたいなのが僕の課題だったみたい」

「先輩はプロボクサーを目指してるのですものね……闘争心は大事ですよ」

合宿は、参加者同士のスパarringが多かった。期待のユース同士の交流会も兼ねているだけあって、やはりボクサー同士、拳を交じえるのが一番てっとり早いと冗談みたいな説明を受けた。

初日の顔合わせスパarringで、僕は連敗した。技術的体力的には他の参加者に劣っていないと思っただけに、ショックだった。

それからは参加者一人一人にコーチがついて、前日のス

パarringの反省と対策をして一日の終わりにまた参加者同士のスパarring、というスケジュールが続いた。

僕がコーチに言われたのは、とにかくハートの問題だ。僕が自己分析どおり、技術や体力では他の参加者に負けていない。スパarringで差がついたのは、今この1ラウンドを勝つ集中力の点だと言われた。

そんなこと言われてもどうすればいいのか、とコーチにくっついてかかると、コーチはどうしようもないとあっけらかに認めた。ただ、今負けて悔しいと思っっている気持ち大事にすること。本来は勝てる実力があると信じる……かの二つだけを守れば合宿期間中に勝てるようになる……かは分からないが、そのうちなんとかなると言われた。

結局、日中に僕が受けられた指導はテクニクの細かな修正ばかり。高度は高度だけど、わざわざ飛行機に乗ってまで受けた指導だったかなと、参加したのを後悔した。

最初の一週間くらいは負け続けるわコーチへの不信感はあるわ、うんざりする日々が続いた。競争の場に立たない雪菜ちゃんを羨ましく思い、なんで自分はボクシングを選んだんだらうと悩みすらした。

そんなある日のスパarring中に、僕はキレた。といってもルールを無視して暴れたわけじゃなく、ちよっと攻め方が強引になっただけだ。普段の僕なら避けるような、リスクの高い手。これで一発を貰ってしまうようなら、コーチも指導を変えてくれるだろうという下心もあった。なのに、勝ててしまった。僕の定石から外れたボクシングに相手が動揺すると、反比例するように僕は冷静になって隙を

見つけられた。答えの見たパズルを解くように、すいすいと相手のディフェンスを攻略してクリーンヒットを奪うことができた。

それまでの僕は、基本に忠実に、リスクに対して最大効率を狙った動きばかりを意識していた。国内の格下が相手ならそれだけで勝てた。ジムの強豪プロ相手ならどうせ勝てないなりに一番善戦できた。でもこのやり方は、相手と差がついたときにリスクを負って逆転しにいけない。僕と同じくらい強いライバル達が相手なら、1ラウンドの間に優勢劣勢は何度も逆転する。相手が劣勢のときは巻き返しに来るのに僕だけ劣勢に甘んじているのだから、勝てるわけがなかった。

一度勝てると、あとは繰り返しだった。少しでも分が悪くなったと思ったらやり返すことを心掛けた。最初のうちはリスクを取りすぎてカウンターの餌食えじきになったりもしたけど、何度か痛い目をみて加減が分かるようになってきた。反撃するにしても、状況に応じてどの程度のリスクを取るかを使い分けられるようになった。逆に序盤から強引にリードを奪って、相手をリスクを負わざるを得ない状況に追い込んでカウンターで討ち取ったりもした。

上手いボクシングから、勝つボクシングへ。それが合宿を通じて僕が成長したところだ。

「……というわけで、最後の一週間は勝率トップを取れたよ」「すごい、すごいです！先輩は世界を獲れちゃうんですね！」

「あはは、そんな簡単にはいかないよ。僕もライバル達も、

世界の舞台で対決するまでもっともっと成長するんだし。コーチにも言われたよ。今は基礎が一番できて僕が勝てるけど、これからそれぞれに勝つボクシングを磨いて独自の技を身につけてくるって。それを一人ずつ攻略して勝たないといけないって」

「なるほど……これからどんな練習をするか、まさに『勝つ練習』をやるかが将来の勝負を分けるのですね」

雪菜ちゃんは拳を握りしめ、我がことのように奮いたった。僕の話聞いてくれる雪菜ちゃんの反応が嬉しくて、つい勝ったスパリングを中心に自慢話を続けてしまった。「……それで、ユーリイがボディに自信を持ってたのは燕イェンとのスパードで見えていたから、敢えて僕のお腹を囮おとりにしたんだ。燕が3発で崩れてたから、僕は5発まで耐えてやるって決めてね。3発目で意識が飛びかけたんだけど、ここを耐えれば勝てるって信じてマウスピースを噛みしめて、なんとか5発貰っても立ってたんだ。ユーリイのやつはカウンターが怖いって思ってたも、ボディを打ち続ければ勝てるって信じてたから、ボディブローを一番打ちやすい位置に留まっていた。そこにアッパーを打ち込んで、逆転KOしてやったよ」

どれほど話していただろう。ふと気がつく、雪菜ちゃんが俯うつむいていた。

「雪菜ちゃん？」

「……ぼっかり、ずるいです」

珍しく小声で、最初の方はよく聞きとれなかった。それもあって、何の話か分からなかった。

急に顔を上げた雪菜ちゃんは、何かを決意した顔をしていた。

「先輩！ 私ともスパリングしてください！」

雪菜ちゃんから飛び出したのは思ってもみなかった言葉だけど、僕のなかで全てが繋がった。

そうか、僕ばかり楽しかったスパーの話をしたから、ずるいつてことか。

試合には興味なかった雪菜ちゃんだって、これだけ自慢話ばかり聞かされたら面白くないだろう。それともひよっとして、僕の話で雪菜ちゃんも試合に興味を持ってくれたのかも。そうなら嬉しい。

「う、うん、そうだよね、気がつかなくてごめん。でも、ルールをなにか工夫しないと……」

僕と雪菜ちゃんでは、男女差以前に、ボクシング経験に差がありすぎる。そもそも、雪菜ちゃんに教えたのは体作りとパンチの打ち方だけ。ディフェンスもフットワークもできないし、その上に成り立つ駆け引きも当然できない。そういうものを身につけた僕と普通のルールでボクシングしたら、雪菜ちゃんは指一本触れることはできないだろう。かといって、僕がなんとなく手加減する……というのは、雪菜ちゃんが望んでいるスパーじゃない気がする。

幸い、ウエイトだけは僕も雪菜ちゃんも同じフェザー級だ。少し考えて、雪菜ちゃんができる範囲のことで競えばいいのだと思いついた。

つまり、足を止めての打ち合いだ。

トランクスに着替えた僕は、リングの上でシャドーをしながら雪菜ちゃんを待っていた。

雪菜ちゃんが入部してから、部室の隅にカーテンをつけて更衣室を二つ作った。男女それぞれ、といっても僕と雪菜ちゃんしかいないんだから実質的に個室だ。その更衣室で雪菜ちゃんがリングコスチュームに着替えているのを待っている。

静かな部室に響くのは、クーラーの音と、僕のリングシューズがキャンバスを擦る音。そして、雪菜ちゃんが着替える衣擦れの音。

どうしても聞こえてきてしまうそれをかき消そうと、僕は必死でシャドーのペースを上げた。

やがて、雪菜ちゃんが更衣室から出てきた。ロープを広げてリングへ招きいれ、リング中央で向き合う。

「なんだか……いつもの部室なのに、緊張しますね……」
練習でリングに上がることはあっても、そういうときはすぐに練習に取りかかる。これから僕たちがすることもあいまって、雪菜ちゃんはそわそわとリングの外やコーナーポスト、そして僕へと視線をさ迷わせる。

雪菜ちゃんは片側に寄せたポニーテールとおでこを出すゴム製ヘアピンはそのままに、制服をスポーツブラに着替えていた。

ボクシンググローブに負けない大きさのおっぱいが、スポーツブラの中に収まっている。激しく運動しても揺れないようしっかりと固定されているはずなのに、それでも重

たげに見える。

つい目がいく胸から視線を引き剥がすと、目に入るのはいっきりした肩と腕。二の腕は入部したときより、心なしかシャープになっている気がする。

バストの下側を見れば、女の子らしく丸みを帯びたお腹がある。表面はぷにぷにと柔らかそうだけど、すらりと引き締まったくびれ、縦に割れたおへそを見る限り、この下に厚い腹筋の層ができていることは間違いない。

雪菜ちゃんを使うボトムスは、なぜかブルマだ。これが一番動きやすいから、誰に見られるわけでもないし、と言って普段から練習に使っている。僕もいるんだけど……。

女の子の必要最低限だけを覆うブルマから伸びる脚は、やはり肉が乗っていて柔らかそう。けれど芯の通った立ち姿は、確かな体幹に支えられている。

一見すると今まで通りにふわふわとした女の子の体だけど、よく見るとボクサーとして急速に仕上がっている。見ればほっとする顔立ちはそのままだから、僕でさえ制服越しじゃ気付けなかった。

「雪菜ちゃん、ホントに夏休みの間にすごく練習したんだね。見違えるくらい筋肉がついてる」

「えへへ。頑張った自信はありましたけど、先輩に言ってもらえると嬉しいですね。ほらっ、腕だって……」

そう言うと、雪菜ちゃんは右腕を持ち上げ、力こぶを作ってみせる。夏休み前は脂肪に埋もれて見えなかった力こぶが、今はその厚みを越えてはつきりと浮かびあがっている。「ただ、そのことで一つ言わなきゃいけないことがあります

て……その、階級が上がっちゃいました……二つほど……」

「そうなの……？ 変わったように見えないけど……」

雪菜ちゃんのシルエットは夏休み前と変わっていない。制服の上からじゃ違いは分からなかったし、今見てとった変化もよく見れば分かる程度。二階級上がったってことは、僕のフェザー級に対してライト級になったはずだ。

考えられるのは、トレーニングで燃焼した脂肪と増えた筋肉の体積がちょうど釣り合った、ってこと。筋肉の方が密度が大きいから、脂肪と筋肉が入れ替われば入れ替わるほど体重が増える。

だけど、脂肪と筋肉の差だけで二階級も上がるなんて、すごいトレーニング量だ。

「先輩と階級を揃えておきたかったですけど、練習を頑張ったあとのご飯がおいしくて、止まらなくて……」

「あはは、雪菜ちゃんらしいね。一ヶ月ちよつとでこんなに体作りができるなんて、すごいよ」

「それで、あの、先輩は階級を守ってますよね。私とスパリングして大丈夫でしょうか……」

確かに、打ち合いだけのスパリングを計画したのは、僕と雪菜ちゃんが同じ階級だからって計算もあつてのことだった。

とはいえ、その前提では僕の方がかなり有利だ。男女で体脂肪率や骨密度の差がどうしてもあるし、雪菜ちゃんが練習しているパンチの打ち方だって僕の方が何年も経験がある。それに試合経験のない雪菜ちゃんは殴られ慣れていない。そういう状況で、僕がスパリングを余裕を持って

コントロールして、いつでも止められるようにするつもりだった。

だから、階級越えといっても、まったく勝ち目がないほど危険な組み合わせじゃない……はずだ。

それに、雪菜ちゃんにカッコつけたい下心もあった。雪菜ちゃんのためにスパリングをやると言って、階級差を聞いてやっぱりやめるといふのは、どうしたってカッコがつかない。

「うん、大丈夫。でもごめん、僕のペースが落ちたら、雪菜ちゃんがスパリングを止めてね」

「は、はいっ！ 気をつけます！」

「それじゃ……やるっか」

僕が拳を突き出すと、雪菜ちゃんもグローブを合わせてくる。グローブタッチをすると、僕も雪菜ちゃんも緊張感が一段変わる。

僕は前から持っていた赤グローブ、雪菜ちゃんは青。入部したてのころに頼まれてお店を案内したグローブだ。もっとかわいい色や勇ましい柄も勧めただけけど、これがいいと雪菜ちゃんが言って即決した愛用品だ。

「ゴングはないから、雪菜ちゃんから打ってきて」

「は、はいっ……！！ いきます！」

打ち合いだけの僕達のスパリングは、最初から接近戦。普通のボクシングなら、たまにしか入らない間合いのまま睨み合う。雪菜ちゃんがグローブを握り締める音すら聞こえる距離で、僕は雪菜ちゃんの、対戦相手の初撃をよく観察する。

緊張で硬ばっていた体が、構えを取ると自然体になっていく。パンチを打つ動作が体に染みついている。ボクシングを始めて4ヶ月の女の子が、いったいどれほどサンドバッグを叩いたのだろう。

僕を見つめる雪菜ちゃんからはいつもの愛らしい表情が消え、対戦相手を冷徹に観察するボクサーの目になっていた。僕の背中に冷たい感触が走り、世界中の若手と競った合宿のリングの緊張感に引き戻される。

雪菜ちゃんが放ったのは、顔面下真ん中狙いの左ストレートだった。

「やああっ！」

「っぐ！」

駆け引きもなくいきなり放たれた強打は、簡単にガードできなかった。けれど、その威力を受け止めるのは簡単なことじゃなかった。

インパクトの瞬間、こらえた体から息が漏れた。青グローブを止めた両腕がビリビリと痺れる。これほどの重打は、合宿に集まった強豪の中でも一番のパワー自慢、ハシム相手では経験がない。

ハシムと同様、雪菜ちゃんのパンチ力はウェイトや筋力だけに頼っては到達できない域だ。体重をなめらかに乗せるフォーム、インパクトの瞬間に拳を固めるタイミング、そして隙を作らない拳を戻すスピード。教本で説明されるやり方を越えて、自分の身体に合ったパンチの打ち方を研究するレベルだ。

揺らぎ、驚く僕を見て、雪菜ちゃんは自信を深めたようだった。眼光の鋭さが増し、今の手応えを閉じこめるように拳をぎゅつと握る。

いつもなら、雪菜ちゃんがどうでしたかと聞いて僕の返事待つところだ。だけど、パンチを受けた僕は、どんな言葉よりも速く雄弁に、思ったことを伝えてしまっていた。二発目が来る。そう思ったのと同時、僕のボクサーの身体が動いていた。

「しいっ！」

「おうっ！」

パンチを繰り出そうとしていた雪菜ちゃんのボディへ、ショートアッパーを叩きこんだ。

雪菜ちゃんの柔らかさそうなお腹に、赤グローブがめりこむ。脂肪の層に隠れた腹直筋を抉り、その下に守られた内臓まで届いた手応えがあった。ボディアッパーはこのスパリーングみたいな接近戦で何度も助けられた、僕の隠し武器だ。振り抜いた瞬間、やりすぎた、と思った。ボディブローは腹筋だけで耐えられるものじゃない。雪菜ちゃんがこの一撃の痛みと苦しさとでギブアップしてしまってもおかしくない。初めてのスパリーングを、僕の余裕のなさで台無しにしてしまったかもしれないと心配した。

けれど雪菜ちゃんは、腹から空気が抜けたような太い声を漏らしたものの、倒れるどころか構えた拳を下ろすことすらしなかった。僕のアッパーは雪菜ちゃんの内臓に届いたはずだ。それを耐えたのは、日頃からキツイ走り込みで内臓をイジメ抜いている証拠だ。誰に強制されるでもなく長

時間のロードワークを続けて、その苦しみを味わう。そんなことを続けられる鋼の精神力を持った雪菜ちゃんは、恐るべきボクサーだ。

「うっ……はぁ、これが、先輩の、パンチ……想像以上、です……」

雪菜ちゃんは苦しげに呼吸を整える。生まれて初めてお腹を殴られたのだ。ダメージ以上に、スパリーングとはいえ精神的なショックもあるだろう。

やっぱりこの一発で終わりかもしれない。そう思って雪菜ちゃんの様子を見てみると……。

「うぶうっ!」

「はぁ……うっ……お返し、です……っ! 先輩も、どんどん打ってきて……もっと、くださいっ……」

雪菜ちゃんのフックが僕のボディに抉りこまれていた。殺気を感じてとっさに腹筋を固めたものの、やはり重たい一撃。防衛が間に合わなかったら、テンカウントを聞くのは僕の方になるところだった。

僕はボクサーとして追い込まれ、雪菜ちゃんの積極的な言葉も聞いて胸が熱くなる。苦しいときこそ即座に打ち返してくる雪菜ちゃんは、油断した僕なんか簡単に倒してしまえる強敵。

この娘に勝ちたい。二人で決めたルールの中で、僕の持つ力がこの娘を越えられると証明したい。雪菜ちゃんの初めてのスパーリングだったことも忘れて、僕の中で猛烈に闘争心が湧き立っていた。

もちろん、ボディにはボディで。

「うぷっ!？」

「僕も、負けないよ……! どんどん行くからね……!」

雪菜ちゃんの土手っ腹を挟むボディフック。厚い脂肪と堅い腹筋に阻まれる手応えの奥に、柔らかい肉の感触が僅かに伝わる。僕のパンチは雪菜ちゃんに通じる。このままヒットを積み重ねれば、彼女は倒れる。

けれど……。

「かはっ!」

「先輩の、パンチ……先輩の、お腹……先輩と、ボクシング、してます……っ!」

連打しようとした僕の土手っ腹に、雪菜ちゃんのストレートが打ち下ろされた。

激つく割れた腹筋の鎧を、正面から粉碎しようと叩いてくる。リスクを負う選択肢を増やせるようにと合宿中に強化したボディでも、完全には防ぎきれず口から空気が抜ける。内臓に響いたとき特有の悪寒おかんと脱力感に襲われる。このままじゃ、倒される。

だけど、負けたくない!

そうして僕は、交互に相手のボディを打ち合う我慢比べにもつれこんだ。

「んあっ!」「あぐう!」「ああっ!」「ひぐっ!」「うええっ!」

「うぐうっ!」「おううっ!」「んぶうっ!」「お

ぎゅうっ!」「はぐううっ!」「おうおおえっ!」「んむ

ぶうええっ!」「うげえええっ!」

互いのパンチに絞り出される呻き声が、しだいに大きく

汚くなっていく。なのに、パンチの重さはちっとも弱くならない。疲弊した腹筋はだんだんダメージを防げなくなり、苦しさが増速的に増していく。

打たれたら即座に打ち返さなければ、たちまち連打を浴びてノックアウトされてしまう。だから、ボディブローに苦しむ体に鞭うってパンチを繰り返さなくてはならない。雪菜ちゃんを苦しめているほんの数秒だけ、僕は楽になれる。そしてすぐに雪菜ちゃんの反撃が飛んできて、苦しい中でパンチを打つ羽目になる。

終わりが見えないどころか、どんどん苦しくなる展開。合宿でライバル達との死闘を経験した僕だって、なんで闘っているのか分からなくなるくらい辛い。

だというのに、目の前の対戦相手は、そういった苦しさで顔に出ていない。勝利に向かって爛々らんらんと目を輝かせ、僕を見据えていた。

僕のパンチが効いていないはずはない。雪菜ちゃんの目には痛みで涙が浮かんでいるし、パンチがヒットした瞬間には目が見開かれ、愛らしい顔が苦悶くもんに歪む。

全身はあつと言う間に汗でぐっしりになっている。強打を繰り返す筋肉の発熱による爽やかな汗と、内臓を挟まれた不調で分泌ぶんびつされる粘っこい脂汗が層を重ねた、べつとべつの体だ。

パンチがヒットした瞬間の苦悶の声は言うまでもなく、パンチを打つ側になっても吐息の荒さにダメージが見えてしまっている。気をつけて深い呼吸をしようとして、それもうまくできず引きずったような耳障りな呼吸が部屋に響く。

何より、雪菜ちゃんを殴りつける手応えが、積み上げたダメージの深さを再確認させてくれる。硬くしなやかだった腹筋は何度も殴るうちに脆もろくなった。雪菜ちゃんのお腹にグローブがより深く沈み、奥に守られた柔らかい肉を痛めつけている。

今の雪菜ちゃんは、グローブが離れるたびにぐちゅぐちゅとモツが動く僕と同じくらい、苦しくて辛いはずだ。

それなのに、その雪菜ちゃんを倒せるビジョンが全然見えてこない。

「しいっ！」

「おぶろうっ！」

雪菜ちゃんのお腹へ、赤グローブを叩きこむ。水の入った袋がいくつも詰めこまれたような柔らかい手応え。その中心、一番大きな水袋のご真ん中を僕のボディブローは捉えていた。将来を賭けた試合に臨むエリートボクサーでもテンカウントを聞いておかしくないような、完璧なクリーンヒット。

これで倒れてくれ、と心の底から願った。僕も、もう限界だ。もはや相手がかわいい後輩の女の子だってことも抜け落ちて、ただ目の前の強敵に勝ちたいってことと、早く終わってほしいという二つだけが僕の脳内でせめぎ合っていた。

「うあああわああっ！」

「おぐおおおっ！」

僕の願いも空しく、雪菜ちゃんの前グローブが僕のお腹に突き立った。

かわいらしくも闘志に満ちた咆哮ほうこうとともに、L字に曲げた腕が真っ直ぐ突き込まれ、僕は無様な呻き声を上げた。

インパクトの瞬間に腹筋を固めたけれど、痙攣する筋肉は底の抜けたバケツみたいに力が入らず、雪菜ちゃんのパンチの前にはなんの防御にもならなかった。

既にさんざん痛めつけられた内臓が押し潰され、嘔き上がってくる胃液と苦しさを押し返すこともできず口から飛び出す。マウスピースがまだ口に残っているのが不思議なくらいだ。

雪菜ちゃんが拳を引くと、変形した腸がぐちゅぐちゅと音を立てて戻っていく。不安を煽あおる気持ち悪さが全身を這い回り、手足から力が抜けていく。

もう一瞬でも気を抜いたら、膝をついてしまう。だどいうのに、雪菜ちゃんの勢いは衰えることがない。

あと何発打ちこめば、雪菜ちゃんの表情にダメージが見える？ それから倒せるまで、一体何発ボディブローを放てばいい？ それまでの間、雪菜ちゃんの重いパンチを耐え続けることができるだろうか？

無理だ、と僕の中の冷静な部分と言う。そんなに打たれたら体が保たないし、どれだけ根性をかき集めてもこの苦痛を我慢し続けることはできないだろう。

今手を止めれば、楽になれる。少なくとも、軋きしむ体を動かしてパンチを繰り出すという拷問から逃げることはできる。

雪菜ちゃんが、見ていない試合だったなら。

「ぐうううっ！」

「おぼほううっ！」

僕は痛みを引きずった雄叫びを上げながら、追撃を構える雪菜ちゃんへパンチを打ち込んだ。みっともなくとも、結局リングに沈むだけだとしても、雪菜ちゃんに諦める姿を見られたくはなかった。

限界まで疲弊していても、厳しい練習をやり抜いた僕の体は覚えこまれた動きを正確に再現した。体重の乗ったボディブローが雪菜ちゃんのはや筋肉の守りがないお腹を貫き、内臓を潰す気味の悪い手応えを返した。並のボクサーならこれ一発でダウンするような、渾身の一撃。

つまり、さつきと変わらないってこと。

ボディを打ち抜かれた雪菜ちゃんは目を白黒させて悶絶しながらも、すぐに力強い視線で僕を見据えてくる。僕が拳を引いて次のパンチを構えるより早く、雪菜ちゃんの反撃が来る。それを耐えたら、また重い拳を持ち上げパンチを打たなければ。僕はもう、女の子の前でカッコつけた数秒前の僕を恨んでいた。

雪菜ちゃんは前傾姿勢になり、体ごと僕へと接近してくる。踏み込みの力を乗せた、さらに強力なブローが来る。恐怖とともに腹筋を固めても、ずたずたになった筋繊維の反応は頼りない。

けれど、僕のボディへ衝撃はこなかった。代わりに、全身にずしっと重みがかかった。

雪菜ちゃんが、僕に抱きついていて。

「うおっ……とと」

急な重みによるめきながらも、なんとか受け止めることができた。

僕がバランスを取っている間に、雪菜ちゃんは僕の背中へと両腕を回して、しっかりと体を固定していた。

クリンチだろうか、と思っていると。

「はあ……あう……だ、ダウン、です……私、もう、立ってられませんか……」

僕の鎖骨に顔をうずめた雪菜ちゃんが、途切れ途切れの声で申告する。

「ごめん、なさい……うえっ……もう少し……このまま……おうっ……動く、お腹……痛く、てえ……」

かわいい後輩の頼みに、僕は重たい体をしゃきっと伸ばして雪菜ちゃんの支えになった。

倒れる気がしないと僕が思ったのは、やっぱり雪菜ちゃんの勝利への気迫が前に出すぎていただけだった。僕が感じていた手応えからしたら、効いていないわけがない。とくに今は、興奮と緊張感が切れて一気に痛みを感じるところだ。初めてのスパリングを終えた雪菜ちゃんに余韻を味わってもらいたくて、僕も散々効かされたお腹を反らして壁になった。

「せっかく、スパリング、うえ、してもらったん……ですから、頑張ったんです、けど……はっ……先輩に、勝てません、でしたあ……悔しい、です……ううっ……」

雪菜ちゃんは勝負の興奮が収まらないのか、休むと言いながら喋り続けていた。

僕は雪菜ちゃんが初めてのスパリングにそれほど熱中

してくれたこと、僕を相手にそれほど真剣になっただけのこと、一人のボクサーとして感動していた。けれどそれはそれとして、大変なことになっていた。

雪菜ちゃんにあと一歩で負けるというところまで追い込まれた緊張から解放されて、僕の筋肉を盛り上げていた血液は移動を開始していた。そう、とくにたくさん流れ込んでも蓄えられる場所へ。もっと具体的に言う、僕のトランク스에立派なテナントが設営されていた。寄りかかる雪菜ちゃんがあと半歩近付いたら、絶対にバレル。

「腹筋も、頑張って鍛えて……自信あったん、ですけど……先輩のパンチ、想像してたよりずっと重くて、硬くて……奥にズンズン響いて、何度も、トンじゃいそうになって……どんなに走りこんでも、こんなに苦しいこと、なかったです……」

血液の逆流がなくても、この状況はマズすぎた。
なにせ雪菜ちゃんが密着している。僕の鎖骨に向かつて喋る雪菜ちゃんの吐息は熱くてくすぐったいし、汗をかいた髪からは包みこむような汗臭さと甘い匂いが立ち上ってくる。

寄りかかってくる重みと背中中組んだ腕の力強さは雪菜ちゃんの存在感を強く意識させるし、脇腹を押さえる両腕は汗でぬめって妙にエッチな感じがする。

そして何より、雪菜ちゃんのおっぱいが押し付けられていた。スポーツブラに包まれ持ち上げられていた大きな胸が、僕の胸板に押し付けられて潰れている。雪菜ちゃんがみじろぎするたびに、柔らかいものが流れるように形を変えるのが感じられて、僕はもうたまらない気持ちになっ

いた。

当然、トランクスの中もたまらない。痛いぐらいに勃ち上がっていて、ベルトラインをも持ち上げていた。少しでも気を抜けば、このまま出てしまいうさだ。後輩と二人きりの部活中にそんなことになったら、謝っても謝りきれない。

僕の脳内は、なんとかして雪菜ちゃんにバレないようにこの体勢を変えたいと画策する理性と、頑張った雪菜ちゃんを少しでも休ませてあげたい気持ちと、形にならない煩惱とで、今まさに天下三分の様相を呈していた。

「あっ……えへへ……こうしていると、先輩の心臓の鼓動が分かっちゃいますね……どくどく脈打って……私とボクシングして、こうなったんですよ……」

なのに雪菜ちゃんは、甘えた声でこんなことを言う。
僕のことを話す雪菜ちゃんに、なんだかたまらなくなつて危うく煩惱が天下統一するところだった。なんとか理性が押し返して膠着状態に戻すまで、どれだけの時間が経ったか分からない。

不意に、雪菜ちゃんの重みが消えた。

「先輩、支えてくださってありがとうございます。やっと落ち着きました」

僕の肩からグローブを離し、自分の脚で立つ雪菜ちゃん。目の前の彼女の気配に、僕の膨らんでいた海绵体がぎゅつと縮んだ。

「すごいワガママで、こんなことしちゃダメだって分かっ

てます。でも、もう我慢できなくて……」

僕はもう、この魅力的な先輩が何を言うつもりか分かっていた。きつと、普通にダウンせず僕に寄りかかって立ち続けたときから、そのつもりだったのだろう。

「私ともう一度、今すぐ……スパーリングしてください！」
雪菜ちゃんが顔を真っ赤にして言う。

僕は真っ直ぐ見つめ返した。

「リベンジマッチだね。うん、受けて立つよ」

トランクスの盛り上がりは収まっていた。僕の前に立っているのは大事な先輩で、肉体も精神も一流のボクサーだ。全身全霊をかけて相手をしなければ、あつという間にノックアウトされてしまう。無駄なことに使える血液なんて一滴もない。

「雪菜ちゃん、さっきはつい意地になってボディだけの勝負になっちゃったけど、今度は顔も狙っていくよ。上下を打ち分けてクリーンヒットを当ててみせるから、覚悟してね」
「はいっ！ 私も、先輩の頭を揺らしてノックアウトしちゃいますからね！」

ぐっ、と青グローブを突き出して雪菜ちゃんが笑う。

先輩、これから絶対、誰にも負けないでくださいね(体験版)

試し読みはここまでとなります。続きは製品版でお楽しみください。

発行：柱前堂

連絡先: niryu_box@yahoo.co.jp

著者：にりゅー

Pixiv: 1827721

twitter: @niryu_box

初版：2023年12月29日

本作品の、引用に該当しない無断の転載、転売、配信を禁じます。

本作品の、18歳未満の閲覧を禁じます。

本作品はフィクションです。実在の人物、団体、人体構造とは関係ありません。人体について、本作品を参考にしないでください。